



## 大相撲の国際化について思う

本田 博 (1972年卒、河本研)

[hiroshi-h@wave.plala.or.jp](mailto:hiroshi-h@wave.plala.or.jp)



近年、モンゴル、米国、ヨーロッパ、ロシア出身等の力士の活躍が目立ち、日本の国技である相撲も国際化の途上にあるように見える。また、国立大学の相撲部でも、日本人学生の多くが見向きもしない中、ヨーロッパ出身の主将などが現れ、国際化の波が到来しているようである。

しかし、朝青龍への対応の仕方や、近年の曙の格闘技への転向の仕方などを見ると、横綱まで務めた外国人力士の活かし方にぎこちない面が感じられ、引退後の道にも、相撲界の中で、国際的に幅を持った選択肢を持たせる事が望まれる。従来、横綱、大関を始めとする三役を務めた外国人力士には、日本人女性との結婚や日本への帰化が強く勧められ、それに従い、無難な道を歩んでいる外国出身の力士も見られる。

そのような中で、モンゴル人女性と結婚し、しかも数々の記録を打ち立てた朝青龍は、相撲界のパイオニアの一人であるが、本人及びその夫人には、慣れないしきたりの中で、人知れない苦労やプレッシャーがあり、モンゴルで十分にリフレッシュして、次の場所に備える必要があった事は理解できる。海外から見れば、協会の当初の措置は、一種の村八分的な感覚に拠るものと捉えられても仕方ないであろう。

一方、イギリスで発祥したテニスを見ると、世界のほぼあらゆる国で、多くの人々が、この競技を楽しみ、国際化を超え、グローバル化の域に達している。長年、英国人選手のウィンブルドン選手権優勝者が現れず、地元では、英国人選手が優勝するのを待ち焦がれて、勝てないヘンマン選手を応援する為のヘンマン丘ができる程である。しかし、外国人優勝者に対する敬意と賞賛には、国境を超え、無条件のものがああり、大多数を占める外国人優勝選手の中には、ジョン・マッケンローのように、悪名高い程、マナーの悪い選手もいたが、朝青龍が舐めたような苦渋を味わった者は、皆無であるといつて良いであろう。

アメリカの国技である野球でも、イチロー選手など、日本の一流選手が大リーグ記録などを打ちたてて大活躍をし、ワールド・ベースボール・クラシックでは、日本チームを優勝へと導いた。表彰式の際、大会関係者の中には、苦渋の面をあらわにし、同選手に握手もしない役員がいたが、総じて好意的に受け止められていたように思う。

日本相撲協会も、元外国人力士や国際感覚豊かな実務家・カウンセラーなどを、役員として積極的に入れ、もう少し外国人力士の立場に立って考える事や、大相撲という事業の国際化などに前向きに取り組んでは、如何であろうか。グローバル化の進んだスポーツでは、スポーツ心理学やスポーツ科学をうまく取り入れ、常に選手のメンタリティを高める仕組みづくりにおいて進んでいる。また、海外諸国にも相撲協会を創設する事などを視野に入れると外国出身の力士の活用が不可欠となり、これに関して、より発展的な意見が出てくるであろう。

同横綱は、明らかに日本人力士にはないものを持ち、関係者には理解できない一線を越えている面が多々有るようだが、そうであるからこそ、外交的に見ても、キャラクター的に見ても、そう出て来ない逸材である。また、一部の元米国人役力士や他の現役外国人力士なども、大相撲の国際化やグローバル化を押し進めるのに格好の人材である。彼らが、より国際的に貢献できるように、配偶者が日本人でない場合などには、時には、地方巡業の代わりに、祖国で相撲の普及にあたる事を認めるなど、国際化の地ならしの役割を担ってもらっても良いであろう。

諸外国にも、相撲協会が誕生し、将来、予算面でも、できる範囲の規模で、モンゴル場所、米国場所、欧州場所、ロシア場所などの定期開催や、年に1回、世界場所を日本で開催する事などを視野に入れれば、夢が広がり、海外で生まれ育った力士を、もっと広く、有効に活かす事に繋がるのではないかと思う。

元来、日本人は、1600年代初期に山田長政がタイに日本人町を作り、現地では好意的に受け入れられていたにも拘らず、本国の手厚い支援が得られずに消滅し、逆に、1600年に東インド会社を作った英国に先を越され、オーストラリアまでイギリスの文化圏になってしまい、日本にとっては、現在に至るまで、政治・経済面で大きなハンディを背負うことになってしまった。この際、外国人力士を角界の大使として活用すれば、日本文化普及促進の一助にもなるであろう。

日本の相撲界も、「世界の相撲」としての将来構想を持てば、横綱・大関などのあり方についても、もう少しグローバル性や融通性を持たせることができるのではないだろうか。どのような事があっても、朝青龍のような逸材を潰してしまう様な事や、他の格闘技に転向する事を余儀なくさせてしまうような事があれば、相撲界にとって

取り返しのつかない損失になる。

日本相撲協会は、相撲界を支え、かつ一時期、一人横綱として引っ張ってきたこの稀有の功労者が気持ち良く立ち直れるよう、本人の立場や意思ならびに医師の意見を謙虚に受け止め、尊重すべきである。

協会には、幕内力士の4人に1人が外国人力士である現状を踏まえ、彼らが、海外でも、相撲界に大きく貢献できるような措置や制度などを早急に検討し、国際化の下地を作っていただくよう、英断と迅速な対応を期待したい。

本稿は、朝日新聞2007年8月23日付朝刊 オピニオン面(15面)に掲載された原稿を改めたものである。



## —— 京機短信への寄稿、 宜しくお願ひ申し上げます ——

### 【要領】

宛先は京機会の e-mail : [jimukyoku@keikikai.jp](mailto:jimukyoku@keikikai.jp) です。

原稿は、割付を考慮することなく、適当に書いてください。MSワードで書いて頂いても結構ですし、テキストファイルと図や写真を別のファイルとして送って頂いても結構です。割付等、掲載用の後処理は編集者が勝手に行います。

宜しくお願ひ致します。

# エタノール燃料の問題点

(つづき)

石田靖彦

isiyas@aa.bb-east.ne.jp

## 3. 石油消費と CO<sub>2</sub> 排出低減の効果とエネルギー収支論争

ガソリンをエタノールに切替えるそもそもの目的は、化石燃料、特に石油消費と CO<sub>2</sub> 排出の削減にある。その効果が実際にどれ位あるかは最も基本的で重要な問題だが、それは製品となったエタノールのエネルギーが、その生産のために費やされたエネルギーよりどれだけ多いかというエネルギー収支に関係する。現在の

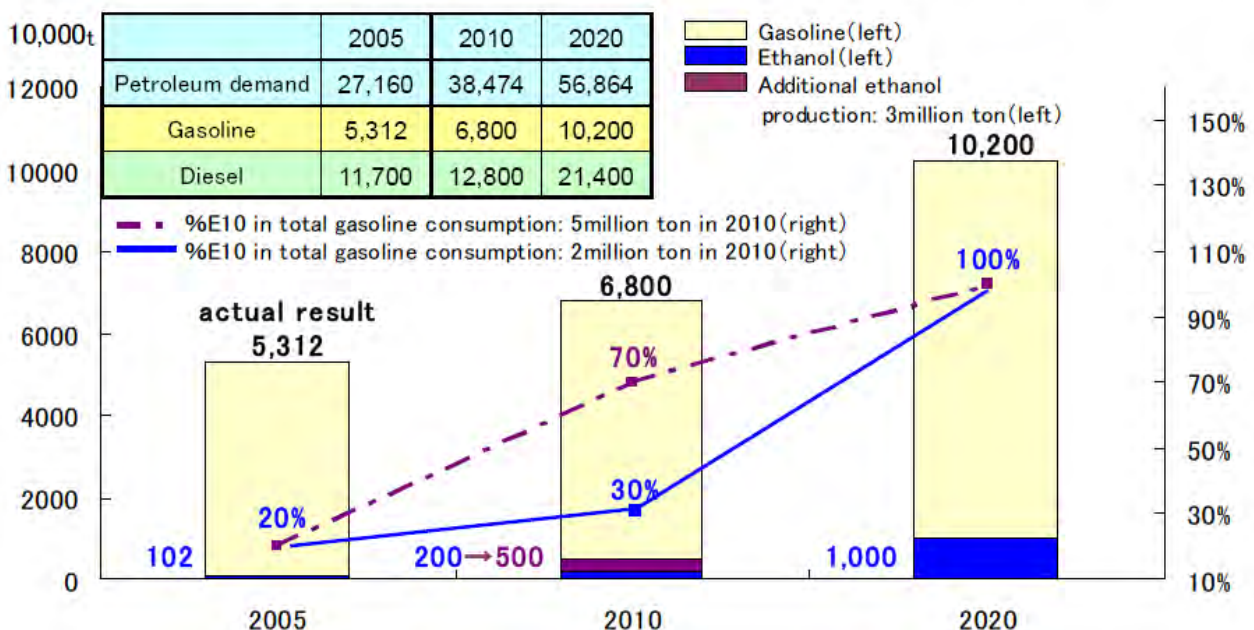
食糧生産が肥料、農薬、灌漑、農業機械、運搬などに大量の化石燃料を投入していることはよく知られている。食糧より需要の多い燃料作物では一層の大量生産が必要なので、化石燃料の投入は更に増えるかも知れない。エタノール生産では、これに加えて、エタノール精製工場でもエネルギーが投入される。生産されたエネルギーとその生産の全ての過程で投入した化石エネルギーとの比をエネルギー収率とする。ここでは、投入したエネルギーとしては化石燃料のみを考え、燃料ではなく肥料の原料として使われる化石燃料も含めるが、太陽エネルギーや人

この記事中の写真等は、本文と関係ありません。



[http://journeytoforever.org/ethanol\\_link.html#ethanolcar](http://journeytoforever.org/ethanol_link.html#ethanolcar)

Forecasted Gasoline Demand Reduction by Bio-ethanol Use



Source: Prepared from "Supply and Demand Analysis on Petroleum Products and Crude Oils for Asia and the World - FY2005 Investigative Research on the Petroleum Industry", by IEEJ

力は含めない。また、生産されたエネルギーは製品エタノールおよび副産物である飼料などエネルギーに換算したものである。エネルギー収率が1より大きければ、太陽エネルギーの固定による正味のエネルギー利得があり、1より小さければ、正味のエネルギー利得はなく、エタノールは化石燃料から損失を伴って転換された二次エネルギーのようなものである（ただし原料植物が取り込んだ太陽エネルギーの分だけエネルギー転換損失は軽減される）。



エタノールのエネルギー収率については以前から論争があったようである。特に米国のトウモロコシエタノールに関する論文が多い。工場、農場および調査時期による相違、更には間接的な投入エネルギーや副産物の評価による相違などによって、もとより数値には幅がある。最近では、エネルギー収率を0.78としている Pimentel 等(2005)<sup>6</sup>の論文もあるが、論文の数では1以上と結論するものが優勢で、Wang(2005)<sup>7</sup>、Morris(2005)<sup>8</sup>などによると、代表的な乾式法でエタノールを精製した場合のエネルギー収率はほぼ1.3-1.5程度である。トウモロコシエタノールを推進している米国農業省の Shapouri(2004)<sup>9</sup>は1.77という数値を出しているが、ここには農業機械や工場設備の生産に要したエネルギーは数値が古いという理由で投入エネルギーに含まれていない。

Wang はトウモロコシエタノールとガソリンの生産過程を図に描き、エネルギー1単位の燃料製品を生産するための投入化石エネルギー(収率の逆数に相当)は、製品がエタノールの場合は0.74、ガソリンの場合は1.23であると書き添え、エタノールの優位性を強調している。しかし、エタノールの場合の投入化石エネルギー

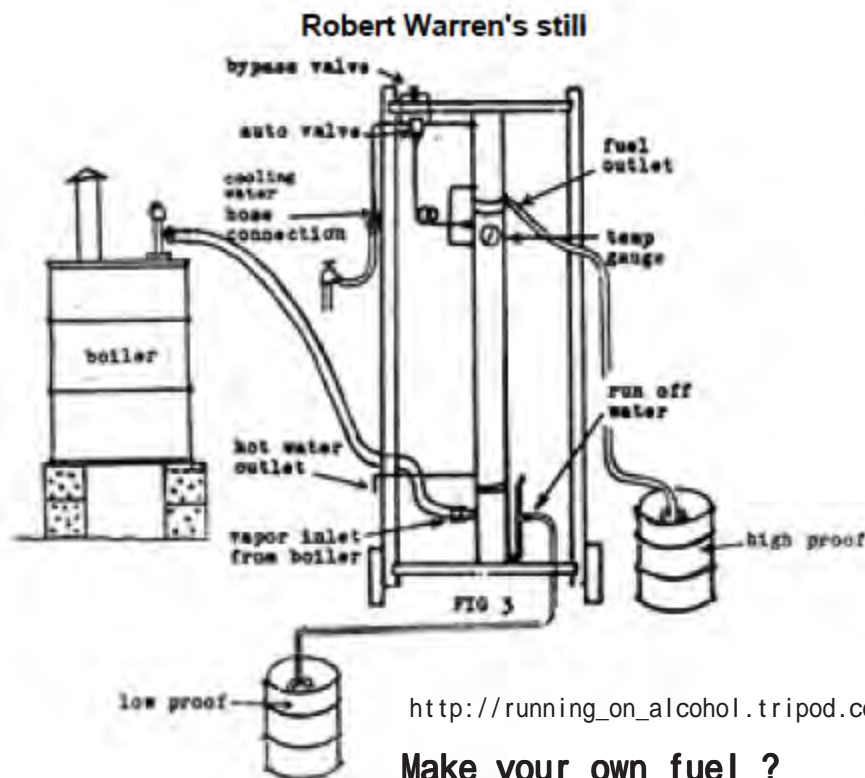
は生産過程のエネルギー源として消費されたものであるのに対し、ガソリンの場合の投入エネルギーは原料エネルギーであるから、大部分は製品の中に残っている。そこで、投入としては生産過程で消費された化石エネルギーのみを採り、



これに対する製品エネルギー(化石エネルギーも含む)の倍率を考えると、エタノールの場合は投入 0.74 に対し製品が 1 だからエネルギー倍率は収率と同じ 1.35 だが、ガソリンの場合は投入 0.23 に対し製品が 1 だからエネルギー倍率は 4.35 となり、ガソリンの方が生産性が高い。これは、ガソリンの方がエタノールより生産が容易で入手しやすいことを端的に示している。そもそも、僅かなエネルギー消費で大きなエネルギーが生産できることが化石燃料の特長であり、それ故にこそ化石燃料が大量に消費されるようになって今日の資源・環境問題を起したのである。逆に、エタノールのエネルギー生産性が低いことは、再生可能エネルギーという利点はあっても、大量生産には不利で、ガソリンのように簡単には普及できないことを示唆している。

**(Footnotes)**

- <sup>6</sup> D. Pimentel and T. W. Patzek "Ethanol Production Using corn, Swchigrass, and Wood; Biodiesel Production Using Soybean and Sunflower" Natural Resources Research, Vol.14, No.1, March 2005
- <sup>7</sup> M. Wang "The Debate on Energy and Greenhouse Gas Emissions Impacts of Fuel Ethanol" Argonne National Laboratory, The University of Chicago. [http://www1.eere.energy.gov/biomass/net\\_energy\\_balance.html](http://www1.eere.energy.gov/biomass/net_energy_balance.html)
- <sup>8</sup> David Morris "The Carbohydrate Economy, Biofuels and the Net Energy Debate" Institute for Local Self-Reliance, 2005年8月、<http://www.newrules.org/agri/netenergyresponse.pdf>
- <sup>9</sup> Shapouri 他 "The 2001 Net Energy Balance of Corn-Ethanol" USDA(U.S. Department of Agriculture) 2004



## 2007年版ものづくり白書

(ものづくり基盤技術振興基本法第8条に基づく年次報告)

<http://www.meti.go.jp/report/data/g70601aj.html>

平成19年5月

経済産業省、厚生労働省、文部科学省

目次 (273KB)

<http://www.meti.go.jp/report/downloadfiles/g70601a01j.pdf>

第1部：我が国ものづくり基盤技術の現状と課題

第1章：グローバル経済下における国内拠点の強化に向けた課題と展望

第1節：我が国製造業の概況と経済における位置付け (1201KB)

<http://www.meti.go.jp/report/downloadfiles/g70601a02j.pdf>

第2節：我が国製造業の海外展開の現状と国内拠点の役割 (1981KB)

<http://www.meti.go.jp/report/downloadfiles/g70601a03j.pdf>

第3節：国内拠点の機能強化に向けた課題と展望 (2294KB)

<http://www.meti.go.jp/report/downloadfiles/g70601a04j.pdf>

第4節：主要製造業の課題と展望 (1045KB)

<http://www.meti.go.jp/report/downloadfiles/g70601a05j.pdf>

第2章：ものづくり人材育成環境の再構築

第1節：ものづくり労働者の雇用・労働の現状 (524KB)

<http://www.meti.go.jp/report/downloadfiles/g70601a06j.pdf>

第2節：団塊世代の大量退職に備えた人材育成 (1426KB)

<http://www.meti.go.jp/report/downloadfiles/g70601a07j.pdf>

第3節：多様な人材が支えるものづくり基盤 (1620KB)

<http://www.meti.go.jp/report/downloadfiles/g70601a08j.pdf>

第3章：ものづくりの基盤を支える研究開発・学習の振興

第1節：産業力強化のための研究開発の推進 (1196KB)

<http://www.meti.go.jp/report/downloadfiles/g70601a09j.pdf>

第2節：ものづくり人材の育成 (1625KB)

<http://www.meti.go.jp/report/downloadfiles/g70601a10j.pdf>

第2部：平成18年度においてものづくり基盤技術の振興に関して講じた施策

<http://www.meti.go.jp/report/downloadfiles/g70601a11j.pdf>

ビジネスイノベーションを駆動するIT活用

<http://www.nri.co.jp/opinion/chitekishisan/2007/pdf/cs20070502.pdf>

経営に貢献する情報化に向けて

<http://www.nri.co.jp/opinion/chitekishisan/2007/pdf/cs20070503.pdf>

ビジネスを変える情報システムの実現

- 全体最適を実現するプログラム・マネジメント・オフィス -

<http://www.nri.co.jp/opinion/chitekishisan/2007/pdf/cs20070504.pdf>

ビジネスを活かす IT サービスの実現に向けて

- 情報システムの運用段階・活用段階を通じたバリューアップ -

<http://www.nri.co.jp/opinion/chitekishisan/2007/pdf/cs20070505.pdf>

IT 構造改革によるビジネス変化への対応

<http://www.nri.co.jp/opinion/chitekishisan/2007/pdf/cs20070506.pdf>

## コンテンツ制作・流通に関する話題 6 話

### 1. 「メディア・ソフトの制作及び流通の実態」調査結果の公表【総務省】

[http://www.soumu.go.jp/s-news/2007/070620\\_4.html](http://www.soumu.go.jp/s-news/2007/070620_4.html)

報告書本文 (PDF:3.3MB)

<http://www.soumu.go.jp/iicp/chousakenkyu/data/research/survey/telecom/2007/2007-1-02-3.pdf>

調査結果概要 別紙(PDF)

[http://www.soumu.go.jp/s-news/2007/pdf/070620\\_4\\_bs.pdf](http://www.soumu.go.jp/s-news/2007/pdf/070620_4_bs.pdf)

報道資料 (PDF:160KB)

<http://www.soumu.go.jp/iicp/chousakenkyu/data/research/survey/telecom/2007/2007-1-02-1.pdf>

### 2. 北米におけるコンテンツ市場の実態【JETRO】

[http://www.jetro.go.jp/biz/world/n\\_america/reports/05001408](http://www.jetro.go.jp/biz/world/n_america/reports/05001408)

PDF ファイルのダウンロード(1.69MB)

[http://www3.jetro.go.jp/jetro-file/BodyUrIPdfDown.do?bodyurIpdf=05001408\\_001\\_BUP\\_0.pdf](http://www3.jetro.go.jp/jetro-file/BodyUrIPdfDown.do?bodyurIpdf=05001408_001_BUP_0.pdf)

### 3. 欧州におけるコンテンツ市場の実態【JETRO】

<http://www.jetro.go.jp/biz/world/europe/reports/05001402>

PDF ファイルのダウンロード(2.26MB)

[http://www3.jetro.go.jp/jetro-file/BodyUrIPdfDown.do?bodyurIpdf=05001402\\_001\\_BUP\\_0.pdf](http://www3.jetro.go.jp/jetro-file/BodyUrIPdfDown.do?bodyurIpdf=05001402_001_BUP_0.pdf)

### 4. ブラジル・コンテンツ産業調査【JETRO】

[http://www.jetro.go.jp/biz/world/cs\\_america/reports/05001396](http://www.jetro.go.jp/biz/world/cs_america/reports/05001396)

[http://www3.jetro.go.jp/jetro-file/BodyUrIPdfDown.do?bodyurIpdf=05001396\\_001\\_BUP\\_0.pdf](http://www3.jetro.go.jp/jetro-file/BodyUrIPdfDown.do?bodyurIpdf=05001396_001_BUP_0.pdf)

### 5. 東南アジア 3 カ国におけるコンテンツ市場の実態 (タイ、シンガポール、マレーシア)【JETRO】

<http://www.jetro.go.jp/biz/world/asia/reports/05001418>

[http://www3.jetro.go.jp/jetro-file/BodyUrIPdfDown.do?bodyurIpdf=05001418\\_001\\_BUP\\_0.pdf](http://www3.jetro.go.jp/jetro-file/BodyUrIPdfDown.do?bodyurIpdf=05001418_001_BUP_0.pdf)

### 6. 家庭用ゲーム業界に求められる国際化への対応【野村総研】

<http://www.nri.co.jp/opinion/chitekishisan/2007/pdf/cs20070407.pdf>



# KART 2007

京都大学フォーミュラプロジェクト KART  
プロジェクトリーダー 堀内 亮  
E-Mail: ryo.horiuchi@t03.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

## 第五回全日本学生フォーミュラ大会

日時： 2007年9月12日(水)～15日(土)

場所： エコパ ( 静岡県掛川市 小笠山総合運動公園 : <http://www.ecopa.jp/> )

### 9月12日(水)

車検 - 技術審査、チルト、騒音、ブレーキ  
静的審査 - プレゼンテーション、コスト、デザイン

### 9月13日(木)

車検 - 技術審査、チルト、騒音、ブレーキ  
動的審査 - アクセラレーション、スキッドパッド、オートクロス

### 9月14日(金)

車検 - 車両の技術検査、チルト、騒音、ブレーキ  
動的審査 - エンデュランス

### 9月15日(土)

動的審査 - エンデュランス  
デザインファイナル、  
表彰式



## 競技種目

## 競技概要 [ 配点 ]

車検	車両の安全・設計要件の適合、ドライバーの5秒以内脱出、ブレーキ試験(4輪ロック)、騒音試験(所定の条件で排気音110dB以下)、チルトテーブル試験(車両45度傾斜で燃料漏れ無し。ドライバー乗車し車両60度傾斜で転覆しない) [ 0 ]
静的競技	<p>コスト</p> <p>予算とコストは、生産活動を行うにあたって考慮しなければならない重要な要素であることを参加者に学ばせることが狙い。車両製造の制約は所定の上限コスト以下。車両を見ながら事前に提出したコストレポートのコスト精度、チームによる製造度合等を確認し、レポートのコストと車両との適合を審査する。一般に購入品目となる2項目について、部品製造プロセスなどの口頭試問を行い、それらの知識・理解度を評価する。 [ 100 ]</p> <p>プレゼンテーション</p> <p>学生のプレゼンテーション能力を評価することが狙い。プレゼンテーションは、『競技のコンセプトに沿い、製造会社の役員に設計上の優れていることを確信させる』という仮想のシチュエーションのもとで行う。 [ 75 ]</p>
動的競技	<p>設計</p> <p>事前に提出した設計資料と車両をもとに、どのような技術を採用し、どのような工夫をしているか、またその採用した技術が市場性のある妥当なものかを評価する。具体的には、車体および構成部品の設計の適切さ、革新性、加工性、補修性、組立性などについて口頭試問する。 [ 150 ]</p> <p>アクセラレーション</p> <p>0-75m加速。各チーム2名のドライバーがそれぞれ2回、計4回走行し、タイムを競う。 [ 75 ]</p> <p>スキッドパッド</p> <p>8の字コースによるコーナリング性能評価。各チーム2名のドライバーがそれぞれ2回、計4回走行し、タイムを競う。 [ 50 ]</p> <p>オートクロス</p> <p>直線・ターン・スラローム・シケインなどによる約550mのコースを2周走行する。各チーム2名のドライバーがそれぞれ2回、計4回走行し、タイムを競う。エンデュランスは、このオートクロスの早いチーム順に走行する。 [ 150 ]</p> <p>エンデュランス</p> <p>直線・ターン・スラローム・シケインなどによる約650mの周回路を約30周する。走行時間によって車の全体性能と信頼性を評価する。 [ 350 ]</p> <p>燃費</p> <p>耐久走行時の燃料消費量で評価する。 [ 50 ]</p>
合計	[ 1000 ]

開催場所、競技種目、スケジュール等の詳細につきましては、大会公式ホームページ (<http://www.jsae.or.jp/formula/jp>) をご覧下さい。また、プログラムは[http://www.jsae.or.jp/formula/jp/5th/program/5th\\_program.pdf](http://www.jsae.or.jp/formula/jp/5th/program/5th_program.pdf) にございます。平日ではありますが、是非とも応援をお願い致します。お越しいただける場合は 濱田 暁 Tel : 090-6053-4461、[satoru.hamada@t02.mbox.media.kyoto-u.ac.jp](mailto:satoru.hamada@t02.mbox.media.kyoto-u.ac.jp) までご連絡ください。